

特集「オープン勘定系の10年」の発行に寄せて

林 尊

2007年5月に、世界初のWindows®上で稼働するフルバンキングシステムである、オープンシステムで構築された勘定系「BankVision®」が百五銀行で本番稼働を始めてから、今年でちょうど10年になる。BankVisionの構想を発表したのが2003年12月である。その10年後の2013年に、地域金融機関10行目となる、大垣共立銀行が採用を決めた（現在では11金融機関が採用している）。また、10年の節目にあたる本年5月には、この大垣共立銀行で予定通り無事に本番稼働を開始した。10年間で10行の本番稼働を達成したことになる。

かつてBankVisionの開発を発表した際には、オープンプログラクトで勘定系システムを構築することについて、HWやOS、データベース、ミドルウェアなどの信頼性を懸念する声や、懐疑的な意見も少なくなかった。しかし日本ユニシスは、BankVisionの開発に着手する以前から、例えば三井住友銀行の対外系接続システム（BANCSシステム/Windows2000で構築）や、信用金庫向け勘定系ソリューションのSBI21（AP構造にオブジェクト指向のカプセル化を取り入れ、開発環境をオープン化）などで、段階的にオープン化に対する実績を積むとともに、以下のような取り組みを行ってきた。

- ・オープン系ミッションクリティカル業務構築支援ミドルウェアMIDMOSTを開発し、メインフレーム並みの信頼性を確保したこと
- ・日米のマイクロソフト社と強固な協力関係を構築し、実証実験を実施、時にはOSやDBMSに対する改造要求を行い、利用技術を確立してきたこと
- ・ミッションクリティカルな業務に耐えうるWindowsサーバES7000をリリースしたこと

こうしてオープン勘定系「BankVision」は百五銀行で稼働を開始した。今まで、心配された品質面で、オープンプログラクトに起因する重大障害は一件も発生していない。かえって、BankVisionがオープンな基盤を採用したことにより、ハード/ソフトの早い進化というメリットを享受している。具体的には、次のようなことである。

- ・2007年当時よりも、はるかに高い処理効率を実現していること。
- ・データベースシステムの進化等によりBCPの高度化を実現していること。
- ・仮想DB、データマートといった最新技術のシームレスな取り込みを実現していること。

その他に、BankVisionの特徴としては、以下のことが挙げられる。

- ・10行への導入はすべて、予定された本番時期を遅らせることなく、また大きな障害もなく無事に本番開始している。

これは、高いプロジェクト管理能力と同時に、勘定系システム構築・移行のノウハウを積み重ねてきたことによるもので、10行分の経験は他の勘定系ベンダーと比してアドバンテージと言えよう。

- ・BankVisionを採用した銀行間の「ゆるやかな連携」スキームを確立している。

例えば制度対応のようなシステム改修に関しては、改修情報の情報交換を行うなどベストプラクティスの共有が可能である。

今後、金融機関をとりまく環境は、様々な変化が予測される。持続可能なビジネスモデルの確立、地域経済発展への積極的な関わりや、人口減少がもたらす様々な課題、行員の働き方改革、仮想通貨の出現やFintechへの対応などである。これらの事象について、ITを活用し、ビジネスエコシステムを構築することにより対処していくことが可能である。そのために、BankVisionのAPI公開、新しい決済方式、データエンジニアリング、さらなる開發生産性の向上、また、周辺領域においても、SoE領域へSmileBranch開発やモバイルタブレット基盤の構築など、新たなサービスの提供を行いながら、実績や実証実験を積み重ねてきた。これらの取り組みは、BankVisionのAP構造の柔軟性が前提にあり、大きな改修を伴わずに実施されている。さらに、日本ユニシスでは、2017年にFinancial Foresight Labを設立し、BankVisionの良さを活かしつつビジネスエコシステムに発展させるべく会社をあげての様々な取り組みを始めている。

本特集号では、これまでの10年間の進化を振り返ると同時に、SoEやモバイル、API公開といった、オープン勘定系周辺での取り組みを紹介する。金融システムだけでなく、業種・業態を超えたオープンイノベーションやビジネスエコシステムの実現に関心を持つ方々の参考になれば、幸いである。

(執行役員 ビジネスサービス部門 第一ユニット長)